



学校だより

錦城の詩

平成24年(2012年)

11月14日(第13号)

明石市立錦城中学校

豊かさの海で溺れる！？

校長 荒井 拓

小雪を間近に控え、朝夕はぐっと冷え込んできました。我が家も「こたつ」(日本独特のなんとも心の落ち着く)をひっぱり出してきました。校長室から見える中庭の桜の葉の赤がシックに目に映ります。17日(土)のオープンスクール。是非、お越してください。校庭や同窓苑の紅葉も楽しんでいただければ幸いです。

さて、我々の子ども時代(保護者の方々の方がずっとお若いことは承知)は、今ほど物が溢れてなかったし、今ほど高性能な高い品質の物もありませんでした。(このことは、いつの時代でもジェネレーションギャップとして言われるのですが…)子どもを育てるうえで、無いことによる育てやすさと有ることによる育てにくさをついつい考えてしまうのは、年のせいでしょうか。兵庫県生まれの臨床心理学者・河合隼雄さんが著書「こころの処方箋」で次のように書いておられます。読んで、考えてみてください。

『物が豊かになったために子育てが難しくなっている点について述べてみたい。…中略…「あれがあれば」どんなに幸福だろうと痛切に感じた経験をもっているのに、自分の子どもに、そのようなものを与えてやればどんなに幸福になるだろう、と考えるのは一応当然のことである。しかし、ものごとはそう単純に運ばないのである。子どもが「あれが欲しい」と願い、それがかなえられる形で与えられたなら、それは嬉しいことだろう。あるいは、その願いを成就するために彼が何らかの努力を払って手に入れたときは、もっと幸福であろう。父親が子どものとき、読みたいと思っていた本を同級生の誰かが持っている知り、頼み込んで借りてきたときと、子どもが別に興味もないのに、多くの本がどっさり届けられ、親に「強制されて」(とその子は感じたことだろう)読めと言われたのと、どちらが幸福だろうか。親は子どものために努力しているつもりで、子どもの幸福を奪っているのだ。心が大切と言っても、心を表現するということは難しいことだ。「私はあなたを心から愛している」などと親が子どもに言ってみても、それほど通じるものではない。物が豊かでないときは、物によって心を表現することがしやすかった。父親が宴会の席に出た折り詰めを持って帰ってくるだけで、子どもは大喜びし、「親の愛」を感じることもできた。…中略…子どものものを欲しがるとは、それを買うお金を十分に持っていないから、それを買わないためには、相当な心のエネルギーを使わねばならない。このとき、親が子どもに対して接する姿勢にこそ、その親の個性が出てくる。叱るか、どなりとばすか、説得する

か、上手にごまかすか、方法はどれでもいい。親の個性にふさわしい心のエネルギーの消費によって、子どもは親の愛を感じるのである。…中略…どんな時代であれ、子どもにとって自分が自主的に何かを欲し、自分自身の努力や忍耐によってそれを獲得することが楽しいことには変わりがない。ものが豊かになってくると、このようなことが自然に生じることが難しくなってくる。その点を親が心得て、それなりの工夫をするなり、心を使うなりしなければ、ものの重みによって子どもたちの心が潰されてしまうことになるだろう。』

中略が多くなってしまい、読みづらくて申し訳ありません。

さてさて、今年度の運動部の快進撃は、その都度お知らせしておりましたが、色々な会合や街角で「錦中のクラブ、強いねえ」「どうなってるん？ 凄いやんか」などの嬉しいお言葉をいただきました、心なしか生徒達の姿も自信が出てきたのか大きく見えます。この調子、この調子。運動だけ？ いやいや、そうではありませんぜ。この度、国語科で学習した成果として、第39回明石市文芸祭において各部門に作品を応募し、見事に入賞した生徒が7名もおりました。以下に入選作品集「ことのはものがたり」より、その作品を紹介します。

○俳句部門(ジュニアの部)応募数3,442句

市長賞！

太陽に向かって泳ぐ夏休み Aさん (3年生)

〈選者評〉 懸命に泳ぐ若者。場所は海か。プールか。力強く、しなやかに、どんどん泳いでゆく。それを「太陽に向かって」と表現した。理屈を言えば「太陽に向かって泳いでいる訳ではない。」作者がそう感じたわけだ。若者らしい大胆な把握である。

奨励賞

夏休みジリジリ焼ける部活動	Bさん (3年生)
太陽に照らされひかる背番号	Cさん (3年生)
梅雨明けを喜ぶ人となげく人	Dさん (3年生)
照れているキミにそっくりプチトマト	Eさん(3年生)

○川柳部門(ジュニアの部)応募数758句

奨励賞

汗かいてただひたすらにした部活 Fさん (3年生)

○短歌部門(ジュニアの部)応募数818首

文芸祭賞

雨上がり道路にできた水溜まり僕を映すよ心の奥まで
Gさん (3年生)